

緑の分析 1. 生物多様性を維持する緑

1) 現況

① 本市では近年、自然の総量が大きく減少

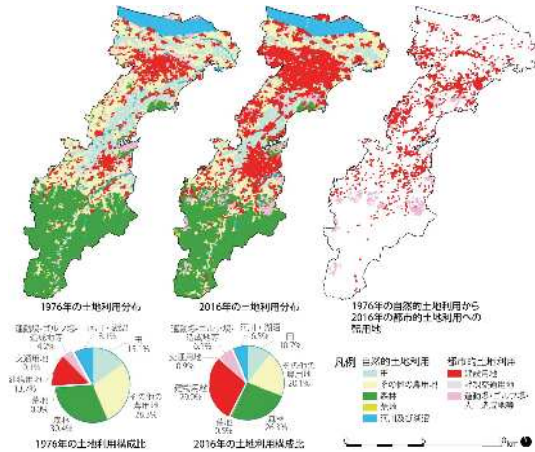


図 昭和 51(1976)年から平成 28(2016)年の土地利用の変遷図

② 本市の生態系の頂点であるチュウヒ、ハヤブサ等の猛禽類の生息地や個体数の減少が危惧

本市環境基本計画（平成 30 年 3 月策定）：貴重な種として確認されるチュウヒ、ハヤブサ、サシバ等について、市街地の増加や農地の減少等の環境変化に伴い、近年では生息地や個体数の減少が考えられる。

本市で確認されるオオタカ、チュウヒ、ハヤブサ等の猛禽類は、地域の生態ピラミッドの最高位に位置する消費者でアンブレラ種とも言われる。アンブレラ種が生育できる環境を保護することで、その傘下にあるほかの種の生育をも保全することができ、広い面積にわたる生物の多様性が保たれることになるという保全上の戦略的な考え方がある。

④ 利根川にはヤナギ自然林や冠水性草原が、児玉の里山にはコナラ等を主体とする二次林など、良好な自然が分布



利根川河川敷のヤナギ自然林、冠水性草原



クヌギやコナラ等の二次林（ふるさとの森公園）

2) 課題

- ①本市に残された生物の繁殖や採餌、移動経路となる緑を生物生息地の骨格的な自然地として効果的に保全していくことが必要（エコロジカル・ネットワーク）①②③
- ②湧水や湿地、自然林・自然草原など良好な自然地を保全することが必要④⑤
- ③緑に触れ学ぶ機会や情報の充実が必要⑥

3) 方向性（案）

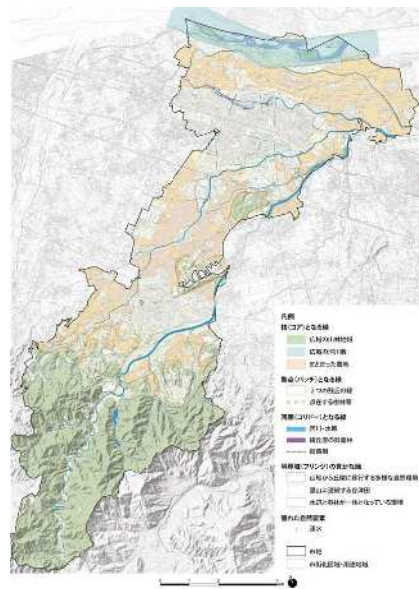
- ・多様な生き物が生息できる環境形成を図る
- ・生物多様性を維持する必要性について、市民の理解を深める
- ・緑を保全する担い手を育成する

③ 本市の生物生息地の骨格的な自然地が分布

本市において優れた自然条件を有する場所を、生物多様性の核（コア）として位置付けつつ、野生生物の移動・分散を可能とするため、コアエリア間を生態的回廊（コリドー）で相互に連結させる「エコロジカル・ネットワーク」という考え方が重要と考えられている。表および図に示す場所を本市の生物生息地の骨格的な自然地として考えられる。

表 エコロジカル・ネットワークを構成する緑

項目	対象地
核（コア）	広域の山林地域
	広域の河川敷
拠点（パッチ）	まとまった農地
	2つの残丘の緑
回廊（コリドー）	点在する樹林等
	河川・水路
境界域（フリンジ）	段丘崖の斜面林
	丘陵地の自然環境
優れた自然要素	水辺と樹林の一体環境（ユニット）
	湧水



緑の分析図「豊かな生物生息空間を構成する緑の核（コア）拠点（パッチ）回廊（コリドー）」

⑤ 市街化に伴う土地被覆の舗装化等により、平常時河川流量や湧水量が減少し、水辺の生物生息環境が悪化

本市環境基本計画（平成 30 年 3 月策定）：かつて若泉地区の段丘崖からの豊かな湧水があったが、市街化により雨水浸透が妨げられたことにより河川流量や湧水が減少した。

熊谷市の元荒川源流にしが生息していないムサシトミヨ（県指定天然記念物）は、かつての元小山川に生息していたが、水質の悪化により昭和 30 年代ごろから生息が確認できていない。



崖線下の湿地（地下水のポンプアップ）（フラワーパーク）



ムサシトミヨ（出所：広報ほんじょう）

⑥ 市民活動では、清掃活動は比較的多いが、里山活動・自然との触れ合いは少ない（市民アンケート）